

## 本丸の景観

－ 福井城下の視的考察 その16 －

伊豆蔵 庫 喜\*

### The sight of the Honmaru in Fukui castle

－ The sight of the Fukui castle town, Part 16 －

Kouki Izukura

This paper deals with the sight of the Honmaru in Fukui castle at the late of Edo period. There was the Honmaru in center, Fukui castle. The base of the main tower which was called 'Tensyu' was on the north west corner of it. The main gate called 'Kawara-gomon' was at the middle of the south side in Honmaru. Two of the three-story towers which were called 'Tatsumi-yagura' and 'Hitsujisaru-yagura' were at the east corner, and at the west corner.

'Gohonjo-bashi' which was the main bridge crossed over to Minami-Ninomaru and 'Orouka-bashi' with the roof to Nishi-Ninomaru.

#### 1. はじめに

本研究は幕末頃の福井城下を描いた『福井城旧景』<sup>1)</sup> (以下、『旧景』とする)を用いて、当時の福井城やその城下を視覚的に検討するものである。本稿はその第16報にあたり、福井城の最も中心部である本丸の景観について考察する。

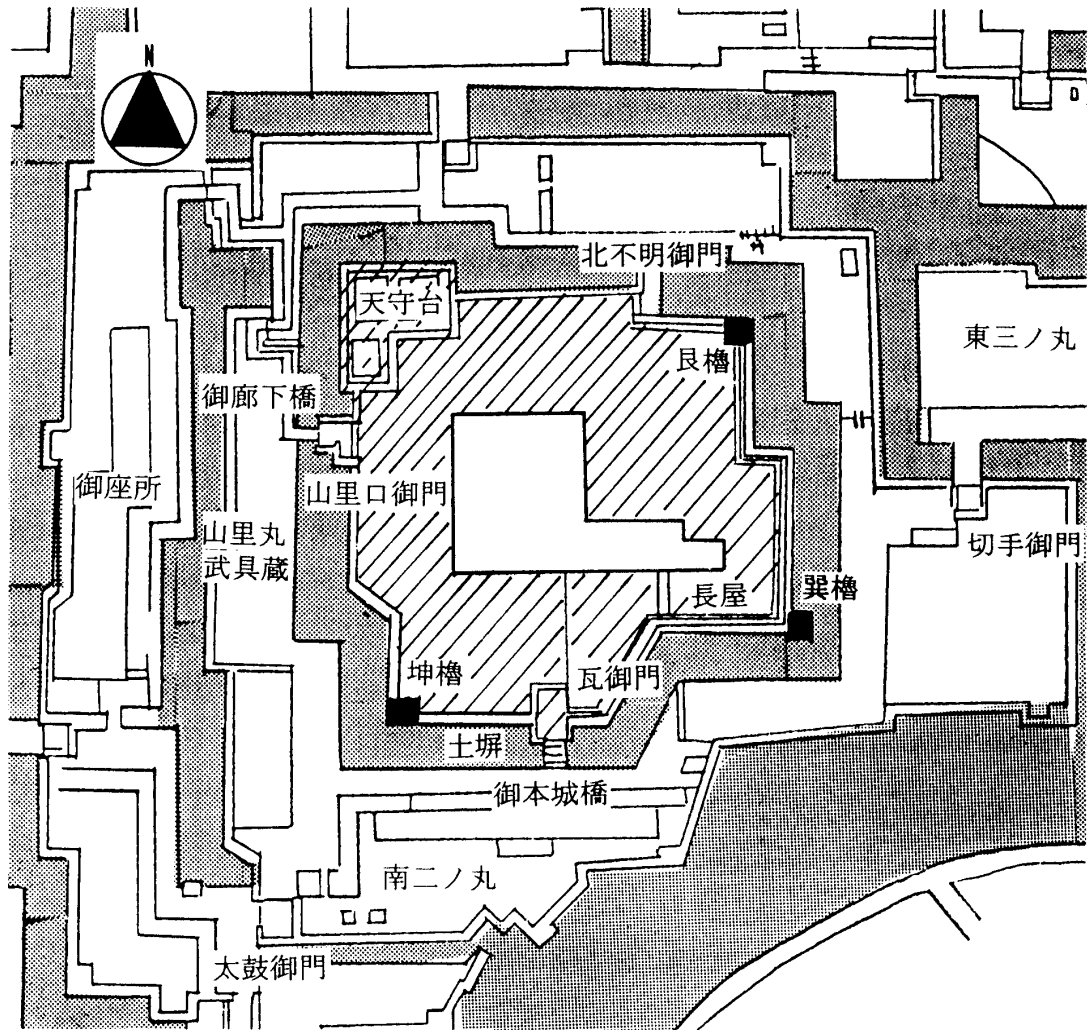
本丸の外側にあたる南二ノ丸と東三ノ丸の景観についてはすでに報告した<sup>2)</sup>。それによれば、南二ノ丸と東三ノ丸の入り口にはそれぞれ常時門番が4～6人詰める太鼓御門と切手御門などの城門が設けられ、出入りを取り締まっていた。そして、門に続く石垣や土塀は屈曲しながら連続して繋がっており、直線的に侵入できない状態であった。また、南二ノ丸の一面には厩やセツ蔵など設けられていて、本丸に通じる御本城橋も間近にみられた。

#### 2. 福井城本丸の概要

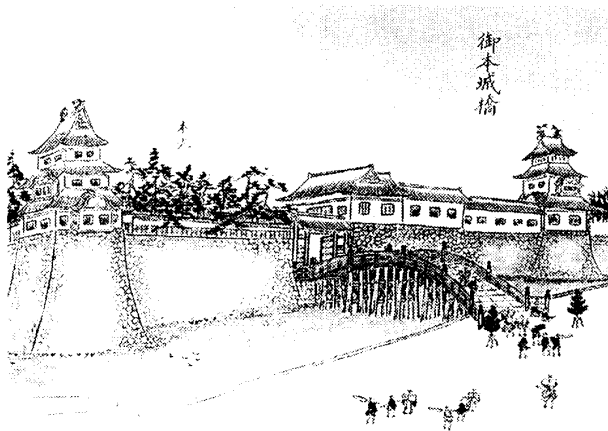
福井城は慶長5年(1600)の関ガ原合戦の功績により、越前国の領主となった徳川家康の次男、結城秀康によってつくられた。秀康が福井に入った翌年に築城工事が始まり、完成までに6年の歳月を要した。御家門かつ68万石の大藩の居城にふさわしい大城で、本丸を中心として二ノ丸や三ノ丸、さらにその外側に二重の郭が同心円状に巡る五重の環郭式の城郭である。そして、本丸と二ノ丸は家康自らが縄張をしたとも伝わっている<sup>3)</sup>。

---

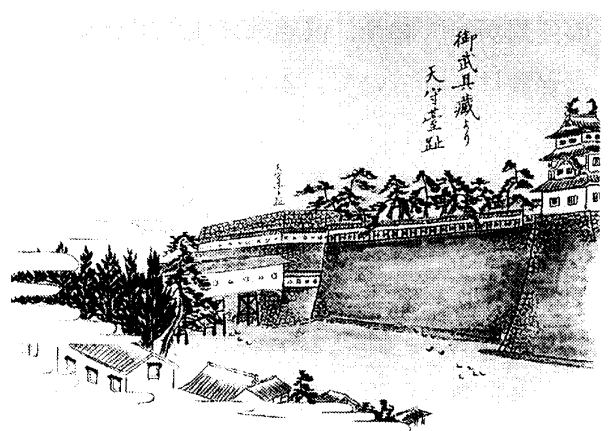
\* 建設工学科 建築学専攻



図－１ 幕末頃の本丸（文政２年写『福井城図』より作成）



写真－１ 本丸南面の様子



写真－２ 本丸西面の様子

（写真１，２は『福井城旧景』より）

図-1は幕末の文政2年(1819)に写された『福井城図』<sup>4)</sup>を書き起こしたものである。本丸は南側を正面(大手)とし、四方を内堀が囲んでいる。南面のほぼ中央に御本城橋があり、これを渡ると本丸の正門にあたる瓦御門がある。この門に入ると、左手(北側)正面に福井藩の藩庁で、時代によっては藩主の御座所も併設されていた本丸御殿がみられる。そして、北西隅に天守台<sup>5)</sup>があり、北東(艮)・東南(巽)・南西(坤)の各隅には三重あるいは二重の櫓が建っている。また、北面の東寄りが搦手で、北不明御門があり、西面には山里口御門および山里丸に通じる御廊下橋が架かっている。

現在、この旧本丸跡には福井県庁舎や県議会議事堂、県警本部庁舎が建ち、周囲の石垣や内堀、北西隅の天守台跡が往時を偲ばせるだけである。しかし、西側の石垣には山里口御門<sup>6)</sup>の柱や梁の仕口跡が残り、南正面に架かる御本城橋や西側の御廊下橋は、藩政時代の名称を今に伝えている。

### 3. 『旧景』にみる本丸の様子

#### (1) 本丸南面の様子

『旧景』にみられる写真-1は、福井城本丸の南面を描いたものである。正面の堀が内堀で、内堀に架かる橋が御本城橋である。橋脚は6本で、両側に欄干が付く。この橋はいずれも茶色に塗られているから木橋とみられる<sup>7)</sup>。

御本城橋を渡った所にあるのが瓦御門で、手前の平屋建ての表門とその右手(東側)奥の2階建ての櫓門からなる樹形門である。表門は中央に両開きの扉、両脇に袖壁が付く。屋根は青色で縦線が書き込まれているから、笏谷石の本瓦葺きと判断できる<sup>8)</sup>。

表門の右手奥にある櫓門は、2階建てで、中央に格子窓(武者窓)がある。櫓門に続く東側の石垣の上には矩折りに続櫓が延び、さらにその右奥に長屋が東隅の巽櫓まで続いている。続櫓と長屋の屋根は表門同様、石瓦の本瓦葺きであり、外壁は白漆喰壁である。

瓦御門については『福井御城之覚』<sup>9)</sup>に「瓦御門 二階は御留守武具方預り、矢竹入」とあり、『佐野文書』<sup>10)</sup>には「番御城代足輕二人」とある。したがって、瓦御門の2階は「御留守武具方」が管理していた矢や竹などの武具が置かれたり、常時御城代の足輕2人が門番として詰めていたことがわかる。

一方、表門の左手(西側)は、土塀が西隅の坤櫓まで繋がっている。土塀の屋根は表門や櫓門同様、青色で縦線があり、石瓦の本瓦葺きであった。しかし、外壁の仕様は櫓門や長屋とは違って、上部が白漆喰壁で、腰下は黒塗りの下見板張りであった。なお、土塀の背後にある松の樹間からは本丸御殿の赤い屋根もみえる。内堀を望んで建つ櫓は、右が巽櫓(東南)、左が坤櫓(南西)である。ともに3重、石瓦の本瓦葺きで、1・2重には唐破風が付き、3重の両端に鯨鉾がのっている。外壁はともに白漆喰壁で、各層に格子窓が付いている。北東隅の艮櫓を含めた3つの本丸の隅櫓は、当初はいずれも2重櫓であった。巽櫓と坤櫓が、『旧景』にみられるような3重になったのは、寛文9年(1669)の火災後のことであった<sup>11)</sup>。

『佐野文書』には、「巽三重櫓 塩辛入」および「坤三重櫓 御書物入」とある。したがって、巽櫓には塩辛など非常時の貯蔵食品が収納されていたこと、坤櫓は書物入れ、すなわち書庫になっていたことがわかる。

## (2) 本丸西面の様子

写真－2は、図－1に示したように、山里丸にある武具蔵前から本丸の西側を描いたもので、やはり『旧景』に含まれ、内題に「御武具蔵より天守台跡」とある。中央に本丸と山里丸を繋ぐ御廊下橋が見え、右端の3重櫓は坤櫓である。

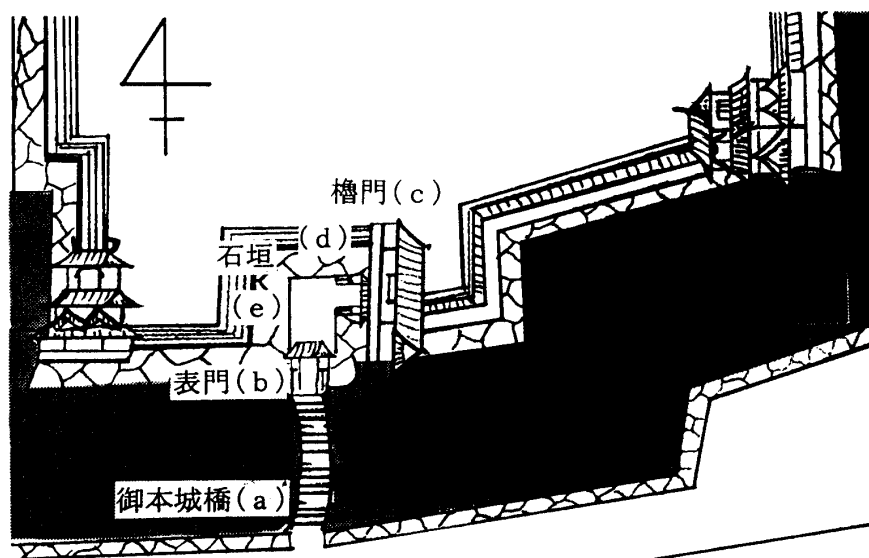
御廊下橋は、本丸から西三ノ丸にある御座所に通じる藩主専用のもので、屋根が懸かっている、両脇は壁であることから、この名がついたといわれている<sup>12)</sup>。屋根は灰色であるから土瓦の棧瓦葺きとみられ、外壁は白漆喰壁で、狭間が付いている。

御廊下橋を渡った所(石垣が途切れている位置)に山里口御門があるが、写真－2にはみられない。

石垣上部の土塀の壁面は、山里口御門(中央)を境に前後で違っている。坤櫓から延びる手前(南側)の土塀は、上部が白漆喰壁で、腰下は黒塗りの下見板張り、奥方(北側)の土塀は、壁面全体が白漆喰で、腰板は張られていない。ただし、屋根は双方とも石瓦の本瓦葺きであった。

なお、奥方の土塀の背後に「天守台跡」との添え書きがあり、石垣積みの天守台が描かれている。先に述べたように、天守は寛文の火災後再建されなかったから、『旧景』が示す幕末頃には天守がなかったためである。天守台は現在もほぼ昔の状態を留めている<sup>13)</sup>。

手前の雲間から見え隠れしている屋根は、山里丸の武具蔵の屋根である。左端に切妻屋根の土蔵があり、庇付きの窓が妻側に1カ所、平側に3カ所みられる。この他の屋根は、いずれも灰色で、縦線の表現があるから、土瓦の本瓦葺きと判断できる。



図－2 瓦御門付近の状態 (正徳4年の『福井御城下絵図』より作成)

#### 4. 規模について

図-2は正徳4年(1714)の『福井御城下絵図』<sup>14)</sup>をもとに、瓦御門とその周辺の石垣を書き起こしたものである。正徳以降、幕末に至るまで本丸に地震や大火などはなく、この状態は幕末まで変わっていないと考えられる。

堀の幅は25~27間で、正面に架かる御本城橋(a)は、長さが21間、幅が3間である。瓦御門については、表門(b)は道いっぱいに建ち、入り口は南向きである。道幅が8間であるから、表門は入り口が3間、両脇の袖壁が2.5間づつと考えられる。表門の東側の櫓門(c)は2階建てで、西向きに門扉を開いている。1階中央の門扉の幅は3間前後、両脇の袖壁が約2間づつで、片側に潜りが付いていたと思われる。櫓門の2階両端は石垣の上のり、石垣を除く1階部分の幅は7間である。

これらの門とともに、枅形をつくる周りの石垣は、東西方向(d)が15間、南北方向(e)が13.5間であるから、枅形の広さは約203坪になる。これまでの最大が鉄御門の180坪であるから、この門はそれよりも大きく福井城の門の中で最大である。

#### 5. 『旧景』の絵図と古写真との比較

##### (1) 瓦御門と御本城橋

写真-3は明治期の瓦御門を写している<sup>15)</sup>。正面に御本城橋があり、橋の欄干や橋脚は木製であることが確認できる。ただし、『旧景』にみられるほど反りは強くなく、『旧景』の場合はやや誇張されて描かれていることがわかる。

橋を渡ると瓦御門があり、手前に平屋の表門、その右手(東側)奥に2階建ての櫓門が続く。この光景は『旧景』とほぼ同じである。また、表門の左右の土塀、櫓門の右奥に続く長屋の構成も似ている。さらに、土塀の外壁が腰板張りで、櫓門や長屋が白漆喰壁であること、屋根が本瓦葺きであることなども同じである。

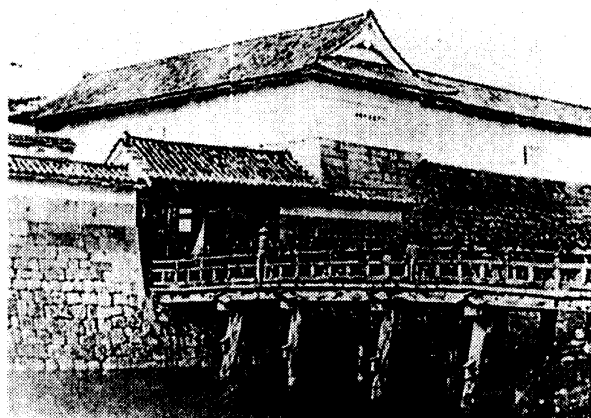


写真-3 明治期の瓦御門

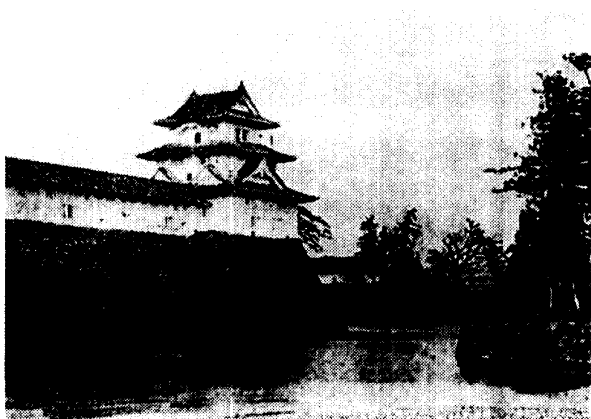


写真-4 明治期の巽櫓

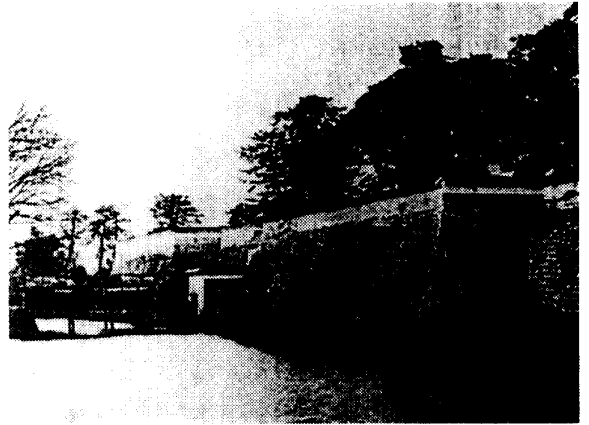
##### (2) 巽三重櫓

写真-4は東南隅に建つ巽櫓である。この櫓は廃藩後、足羽県時代の明治5年(1872)に競売され、取り払われているから<sup>16)</sup>、この写真は明治5年以前のものである。

古写真の巽櫓および櫓の手前にみられる長屋

の屋根は、ともに本瓦葺きで、外壁は白漆喰塗りである。この形式は『旧景』と似ている。

しかし、巽櫓の破風の形や取り付く位置、棟の方向などは『旧景』と違っている。つまり、古写真の巽櫓は2層目の南面に大きな千鳥破風が1つ、西面は比翼入母屋が並び、3層目の西面に唐破風が1つ確認できる。『旧景』の場合は2層目に唐破風が1つ付くだけである。また、棟の方向が古写真では南北方向であるのに、『旧景』は東西方向になっている点も違っている。



写真－5 明治期の御廊下橋付近

(写真－3～5は『ふるさとの思い出 写真集 明治・大正・昭和 福井』より複写)

### (3) 御廊下橋と本丸石垣

写真－5も明治期の古写真で、正面に本丸の石垣と御廊下橋があり、『旧景』の写真－2とほぼ同じ位置から、本丸の西面を写している。御廊下橋に屋根が付いていることは古写真からも確認できるが、屋根葺き材や外壁の詳細はわからない。石垣上には土塀が延び、その背後に松林がみられる。土塀の屋根は本瓦葺きで、外壁は上部が白漆喰壁、腰下は下見板張りである。この光景は『旧景』とほぼ同じであるが、ただし『旧景』に描かれていた天守台跡の石垣は、古写真ではみられない。

## 6. おわりに

以上、福井城本丸の南面および西面の景観について検討した。その結果をまとめれば、以下のようになる。

- 1) 幕末頃の福井城本丸は南側を正面として、中央に瓦御門や御本城橋が設けられ、東西隅には巽・坤両3重櫓が建っている。この形態は慶長期とほぼ同じと考えられるが、巽・坤櫓は当初2重櫓であった。
- 2) 本丸の西面は、内堀を挟んで武具蔵が並ぶ山里丸があり、本丸と山里丸を繋ぐ屋根付きの御廊下橋が架けられている。
- 3) 南面は瓦御門を挟んで東側は白漆喰壁の長屋が巽櫓まで続いている。対する西側は腰板張りの土塀が坤櫓まで延びている。
- 4) 瓦御門は平屋の表門と2階建ての櫓門からなる枳形門で、上階は武具置きで、門番には御城代の足軽2人が常駐していた。枳形の広さは約203坪で、福井城の城門の中でも最大である。
- 5) 古写真に対照すると、『旧景』にみられる門や櫓など建物の位置や石垣、樹木の様子はほぼ同じであるが、御本城橋の反りや巽櫓の破風の形や取り付く位置、棟の方向などに幾つか誤りがみられる。

【註】

- 1) 松平宗紀氏所蔵 『松平文庫』 福井県立図書館保管
- 2) 拙稿「東三ノ丸の景観について」福井工業大学研究紀要 第29号 1999年  
伊豆蔵庫喜・吉田純一「南二ノ丸の景観」日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2 1999年 で報告している。
- 3) 『国事叢記』慶長6年9月条  
「九月(三月共云)より北庄御城御築被仰付、御本丸・二之丸者家康公御縄張、惣郭者吉田修理亮源好寛、  
奉行者清水丹後守孝正、諸大名御手伝(後略)」
- 4) 『福井城図』文政2年写、松平宗紀氏所蔵 『松平文庫』 福井県立図書館保管
- 5) 『国事叢記』寛文9年4月15日条  
「光道君御城下出火、御天守焼失、侍屋舗三百七十五軒、足輕居所百軒、町家五百五十九軒、寺三十七寺  
焼失(後略)」とあり、寛文9年に天守は焼失したことがわかる。
- 6) 有田幸代・吉田純一「福井城山里口御門について」日本建築学会北陸支部研究報告集 第38号 1995年 参照
- 7) 『旧景』にみられる屋根の描写と葺き材の関連については、拙稿「『福井城旧景』にみられる屋根表現」北陸都市  
史学会 1998年 で報告している。
- 8) 註7で掲げた「『福井城旧景』にみられる屋根表現」参照
- 9) 「福井御城之覚」(鈴木準道著・舟沢茂樹校訂)『福井藩史事典』福井市役所 歴史図書社 1980年 所収 p22
- 10) 『稿本福井市史(上)』福井市役所 歴史図書社 1973年 p163
- 11) 吉田純一『城郭・侍屋敷古図集成 福井城・金沢城』至文堂 1997年、『福井市史 資料編別巻 絵図・地図』  
福井市 1989年、吉田純一『福井の城』フェニックス出版 1994年 などを参考にした
- 12) 註11と同じ
- 13) 石垣の現状については、吉田純一「福井城天守について」日本建築学会計画系論文集 第498号 1997年 で詳しく  
報告されている。
- 14) 『福井御城下絵図』正徳4年、松平宗紀氏所蔵 『松平文庫』 福井県立図書館保管
- 15) 『福井市春嶽公記念文庫』福井市立郷土歴史博物館所蔵  
舟沢茂樹・松原信之共著『ふるさとの思い出写真集 明治・大正・昭和 福井』図書刊行会 1979年 所収
- 16) 吉田純一「幕末～明治初頭における福井城の諸建物」日本建築学会北陸支部研究報告集 第37号 1994年 参照

(平成11年12月3日受理)